



度だった。すなわち、広範な一般大衆は、反ユダヤ主義の暴力に対して抵抗（批判）しなかったが、同意もしてなかったのである。ただ、ヒトラー・ナチ党政権にとっては、黙認の態度だけで十分だった（沈黙は同意と見なす）、と永岑氏は述べている。

1933年に始まった第三帝国の反ユダヤ主義政策は、当時他の国で流行していた様々な差別の諸形態をはるかに凌駕するものだった。しかし、世界の多くの国で多様な人種差別がなお支配的であった状況の下では、「累進的急進化」は、1937年の時点では、誰も想像つかなかったとし、イギリス、フランス、アメリカ合衆国等がドイツのユダヤ人差別・迫害を止めることができなかった事情を示している。

第2章・第3章では、オーストリア併合に始まり、第二次世界大戦勃発前夜に至るまでの時期（1938～1939年）、すなわち、第三帝国の膨張が開始された時期におけるユダヤ人迫害・強制移送について述べられている。

この時期は、第一次世界大戦の「敗北の克服」において、オーストリア合邦を実現し、失った領土（ズデーテン）を回復する段階であり、「民族帝国主義」の行動原理でチェコスロバキアを解体して東方への「生存圏」拡大に踏み出した段階であった。民族主義が先鋭化するなかでドイツのユダヤ人に起きたことは脱出、追放、難民化であった。1938年3月に併合されたオーストリア、9月に併合されたズデーテン、1939年3月に解体され保護領ベーマン・メーレンとなったチェコでは、ドイツ本国で5年間かけて遂行されたユダヤ人迫害がきわめて短期間で実行された。ウィーンやプラハにユダヤ人移住センターが開設され、ユダヤ人組織に対する脅迫と強制によってユダヤ人の追放・移住を推進した。

1938年11月9日、ユダヤ人青年がパリで狙撃した外交官が死去すると、ドイツ中で、自然発生的な憤激を装って暴力をとまなう大規模な反ユダヤ主義行動が行われた。「帝国水晶の夜」と呼ばれた11月ポグロムである。ドイツのユダヤにはっきりと生命の危険が迫ると、ユダヤ人組織による非合法移民がおこなわれ、ナチスもこれを手助けした。

11月ポグロム以降、ユダヤ人迫害・追放の諸措置も段階的に拡大し、保護領ベーマン・メーレンでは、アインザッツグルッペ（特別出動部隊）が投入され、政治的敵対者ないしその容疑者を逮捕した。そのなかには「多数のユダヤ人」も含まれていた。シナゴーク、ラビの家、ユダヤ人の商店等に対する攻撃が始まった。ほとんどのユダヤ人が生存基盤を剥奪された。ユダヤ人に対する絶滅脅迫が頻繁になったが、移住、強制的国外移住が当面の具体策で、この段階では殺戮などが問題になっているわけではなかった。ナチ当局は二つの目標、すなわちユダヤ人を身ぐるみ剥がすこと、外国への移住を強制することを追求した。しかしながら、これら二つのもくろみは、相互に矛盾する関係にあった。身ぐるみ剥がされて資産がなくなったユダヤ人は外国に移住することができなくなったのである。

1939年1月30日、政権掌握6周年を記念の国会演説において、ヒトラーは、「国際的金融ユダヤ人」が新しい世界戦争を引き起こすことに成功するとすれば、「その結果はヨーロッパのユダヤ人種の絶滅となろう」と予告した。この「論理」は独ソ戦以降のユダヤ人大量殺害で決定的になっていくが、ヒトラーはこの時点では、「ジェノサイドの何の具体的な計画ももっていなかった」と永岑氏は述べている。

第4章では、第二次世界大戦勃発から独ソ戦開始前夜までのユダヤ人政策について述べられている。第三帝国のポーランド侵攻は、第一次世界大戦の敗北を克服して「東方大帝国建

設」を目指すドイツ「民族帝国主義」の過激化の段階であった。ヒトラーは、侵攻直前に「ポーランドの絶滅が正面にある」と明言したが、ここで言う「絶滅」は、ポーランド指導層の除去を意味する。これを除去してポーランド民族を「奴隷民族」、「指導者なき労働民族」として支配し続けることがドイツ「民族帝国主義」の目標であった。アインザッツグルッペが進駐し、ポーランドの知識階級、聖職者階級、貴族ならびにユダヤ人を無数に殺戮していった。占領されたポーランドの内、ヴェルサイユ条約でドイツが失った領土は再びドイツに併合された。ドイツ併合地域以外の占領下ポーランドには総督府を設置した。

1940年春の段階でもユダヤ人政策は、移住・追放政策が基本であった。4月～6月の西部戦線での電撃的勝利は、フランスの植民地マダガスカルへのユダヤ人移住プランを生み出したが、海上覇権の未実現により、単なる構想にとどまった。

占領地東部に保留地を作り、そのなかにユダヤ人を追放する構想は、ポーランド侵攻中から議論されていた。旧ドイツ国境隣接のほとんどのポーランド地域から、1941年春までにユダヤ人住民が追放された。帝国保安本部長官ハイドリヒは、ユダヤ人を東方に追放するつもりだった。前提として交通事情の良好な諸都市にユダヤ人住民を集中することを命じた。集めたユダヤ人を特定の都市区画のなかに隔離する諸提案が責任部署で議論され、ドイツ当局はゲットーと名付けられた閉鎖的ユダヤ人都市区画の形成を進めた。1940年9月12日、ポーランド総督フランクはワルシャワ・ゲットー閉鎖を決めた。約40万人のユダヤ人が都市の2.4%の空間に押し込まれ、劣悪極まる生活諸条件の下に置かれた。

1941年春、対ソ戦準備が開始され、ユダヤ人がさらにゲットーに移住させられた。必然的に既存のゲットーの状態はさらに悪化した。完全に過密化したワルシャワ・ゲットーでは、発疹チフスが蔓延し、何千人もが死んだ。何十万の住民は餓死寸前だった。大量死は1941年6月よりもかなり前に始まっていた。

占領下ポーランドのドイツ当局幹部は、ソ連に対する勝利の展望によって、総督府からユダヤ人を東方に追放することができると期待した。この時点でなお、占領ポーランドの責任者たちは、「ユダヤ人問題の最終解決」が追放を意味すると見なしていた。

第5章・第6章は、独ソ戦の中でこれまでのユダヤ人迫害・追放が大量射殺、大量殺戮、ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅政策、すなわちホロコーストへとエスカレートしていく過程が述べられおり、「アウシュヴィッツへの道」がいかに開かれたかについて言及する本書のクライマックスの部分である。

独ソ戦について、最近のロシアのウクライナ侵攻と関連して、注目されているのが大木毅氏の著書『独ソ戦-絶滅戦争の惨禍』である<sup>5</sup>。サブタイトルに「絶滅戦争の惨禍」とあるように、この本では独ソ戦＝「絶滅戦争」の概念が採用されている。永岑氏は、「絶滅戦争」のように、この本では独ソ戦＝「絶滅戦争」の概念が採用されている。永岑氏は、「絶滅戦争」の内容については注意が必要だと指摘し、この表現は、「独ソ戦と第二次世界大戦の結末を知っているものが、ヒトラーと第三帝国首脳部の目標、意図・経過・結末を混同していないか」と述べている。つまり、「絶滅戦争」という表現を安易に用いることは、歴史を結果論で論じることになると批判している。また、大木氏は、独ソ戦を「世界観戦争」とみなし、「ヒトラーにとって、世界観戦争とは、『みな殺しの闘争』、すなわち、絶滅戦争に他ならなかった」<sup>6</sup>としている。永岑氏は、「世界観戦争」と「みな殺し」、「絶滅」の直結を問題視し、ヒトラーは「対象無限定の『みな殺し』などを主張していない」と述べ、そのような見方は、ヒトラーの「狂人視」につながる可能性がある」と批判している。永岑氏によると、独ソ戦準

備から開戦前後において、ヒトラーにおける「みな殺し」の対象は、「ユダヤ的ボルシェヴィズム」、その担い手・共産主義者であり、彼らを絶滅させることによって「ソ連の諸民族の奴隷化を実現すること」であった。

また、永岑氏は、「ユダヤ人絶滅」の概念についても、結果論から無限定に使用することを戒めている。「意図派」が主張するように、「あたかも『ユダヤ人絶滅政策』が初めからあったかのように」見ること、すなわち、「結果と意図を同一視」することを疑問視している。永岑氏は、「ユダヤ人絶滅政策」をドイツ内外の政治的・経済的・軍事的・心理等の諸要因の組み合わせた作用・働きの結果と見る「機能派」の見地を「歴史研究の到達点」として支持している。日本では、現在「機能派が勝利した」という見方が大勢であるが、「意図派」の考えが「再登場」していることを永岑氏は懸念している。その一つの論点が「ヒトラー絶滅命令をめぐる論争」である。栗原優氏や大木毅氏は、1941年7月31日のヘルマン＝ゲーリング署名のラインハルト＝ハイドリヒに対する命令書（所謂「ゲーリング令」）を根拠に1941年7月末から8月初旬に「ヒトラー絶滅命令」が出て、「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」が開始されたという説をとる<sup>7</sup>。永岑氏は反論として、1941年8月15日にヒトラーが「全体的解決」は独ソ戦勝利後に実現するとして、この時点での「全体的解決」拒否したこと。占領下ソ連ユダヤ人の無差別殺戮の拡大は、あくまでも、ソ連赤軍の激しい抵抗が強まる中での、治安平定の一環であることをあげて、1941年夏説を否定している。

永岑氏は、ヨーロッパ・ユダヤ人の移送計画から絶滅政策への転換をヒトラー・ナチスの「民族帝国主義」が敗退する過程で引き起こしたユダヤ人迫害・殺戮が累積していった結果とし、その時期を対米宣戦布告・世界戦争への突入に見る1941年12月説をとっている。永岑氏によると、12月説は、独ソ戦、ソの後方地域のソ連・ユダヤ人殺戮の過激化、それと全ヨーロッパ的規模でのユダヤ人排斥圧力殺戮作戦への変化とを地域的段階的に区別する「機能派」の見地を踏まえたものとする。1941年12月説の根拠として、ヒトラーが1939年、1940年、1941年の1月30日の国会演説で「世界戦争に突入したならば、ヨーロッパのユダヤ人の絶滅だ」と予言したことをあげる。つまり、1941年12月の対米宣戦布告・世界戦争への突入により、ヒトラーが国会演説で述べた予言を現実のものにしていくことになったのである。「41年12月が単にポーランドのではなくヨーロッパ規模でのユダヤ人大量殺戮への転換の面影を証拠づける」ものとして、次の史料をあげている。

1. 1941年12月12日党幹部に対するヒトラー演説
2. 1941年12月中旬総督府閣議での総督フランクの演説
3. 1942年1月ヴァンゼー会議における総督府次官ビューラーの発言
4. 1942年1月30日ヒトラーの国会演説

これらの史料の内容については、第6章で紹介されている。

第5章では、独ソ戦の開始された1941年6月から9月までの時期のソ連征服政策とユダヤ人大量射殺拡大過程が述べられている。つまり、ソ連短期征服の野望が挫折する過程とユダヤ人大量殺戮の関係を追跡したものである。

1941年6月22日、独ソ戦が開戦した。ソ連に対する戦争は、ヒトラーの中心的政治目標であった。彼は単に共産主義体制を破壊してこの国を収奪するだけでなく、ドイツ人の「生存圏」を獲得しようとした。ヒトラー・ナチズムの「民族帝国主義」の目指すところであった。ソ連の抵抗は強力だった。これは、ソ連住民に対する犯罪の過酷さに対応していた。6

月初めには、赤軍の軍事コミッサーと政治委員を直接前線で射殺する命令、いわゆるコミッサー命令が出された。この命令は実際の適用においては、赤軍すべてのユダヤ人への攻撃に活用された。目標は、「ユダヤ-ボルシェヴィズム」の破壊、植民地獲得、そしてスラヴ民族の征服であった。ドイツ指導部は、攻撃開始の数か月前から「ユダヤ-ボルシェヴィスト指導部」の殺害を準備した。

ハイドリヒは、殺害すべき集団として、ソ連の党と国家の指導的役員、中間的役員と同様にすべての「ラディカルな諸分子（サボタージュ犯人、宣伝家、ゲリラ兵、暗殺者、扇動者等）」、さらには「党と国家の地位にあるユダヤ人」をリストアップした。対象が限定されたようにも見えるが、「ラディカルな諸分子」の範囲を事態の推移に合わせて拡大していくことは可能で、ユダヤ人殺戮拡大において現実化した。以上のような基本方針のもと、独ソ開戦から6週間、アインザッツグルッペは男子ユダヤ人を捕まえ射殺していった。41年8月からユダヤ人婦女子に殺害を拡大した。これによってユダヤ民族集団の殺戮への敷居が乗り越えられた。

ドイツ国防軍の「電撃戦」は、すでに最初の局面で挫折した。ドイツ軍は、1941年7月の時点ですでにかなりの損害を被っていた。また、開戦後二週間もたたない頃すでに、バルチザンの攻撃による被害が増加していた。占領地域住民のバルチザン支援にくさびを打ち込み、抵抗勢力の分断を強化するためにも、ソ連指導部・バルチザン・共産主義者とユダヤ人を同一視するイデオロギーは機能を発揮した。ユダヤ人殺戮の拡大は、そのイデオロギー・政治観が大きな武器とされたことの証明であると永岑氏は述べている。

第6章では、1941年10月から12月のソ連における軍事情勢・治安情勢の変化に対応して、総督府で、どんな事態が発生していたのか、ソ連での苦境がドイツ占領下のヨーロッパにおいてどんなことを引き起こしたかについて、永岑氏がこれまで発表してきた著書で検討してきたことをVEJで再検証している。

バルバロッサ作戦の挫折により、1941年9月までにユダヤ人の「東方への移送」、とくにソ連占領地への移送政策はまったく実行不可能になった。軍事と政治情勢の悪化を受けて、ポーランド総督府、ドイツ、オーストリア、占領地域でユダヤ人排斥圧力が強まっていた。ユダヤ人排斥圧力と受け入れ不可能な現地事情とのほざまで、ユダヤ人殺戮が開始された。

総督府のユダヤ人の状態は劣悪になっていた。あまりにも狭い地域に押し込められた事情、とくに食料、燃料、医薬品の供給不足は、ここでは必然的に数多くのユダヤ人が体系的な大量殺害開始前に死去するという結果をもたらした。総督府で発疹チフスが流行した。10月初め、総督府に隣接する地域でも、広範囲にユダヤ人殺害が行われた。アインザッツグルッペ、総督府に隣接する地域でも、広範囲にユダヤ人殺害が行われた。アインザッツグルッペの隊長たちは、何時間、何日間と続く殺害は射殺部隊メンバーに心理的に非常な負担となるので、射殺以外のやり方を求めた。ドイツで、1941年夏まで重度の病人・障害者をガス自動車やガス室で「安楽死」させていた「安楽死」殺害専門家を総督府の絶滅収容所建設に投入した。11月1日にベウジェツ絶滅収容所の建設が始まった。ルブリン県親衛隊・警察指導者グロボチュニクはルブリンの「ユダヤ人移住」（「安楽死」）計画を練った。

以上のような諸条件の累積の上に、同盟国日本の真珠湾攻撃とそれに呼応した対米宣戦布告のヒトラー国会演説（1941年12月11日）があった。1939年1月30日の国会演説におけるヒトラーの「ヨーロッパ内外の国際的金融ユダヤ人が世界戦争を引き起こせば、ボルシェヴィズムの勝利ではなくて、ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅だ」との予言の舞台が、遂

に出現した。

12月12日、ヒトラーは東部戦線における危険な軍事情勢と日本の対米戦争突入についてゲッベルスたちに長時間演説した。ゲッベルスの日記(13日付)によれば、その演説中ヒトラーは「ヨーロッパ・ユダヤ人の殺害を戦争中に行うと予告」した。

この時点で、総督府の状況は臨界状態に達していた。1941年12月16日の閣議議事録によれば、総督府の各責任者から「絶望的なまでの食糧事情の悪化」、発疹チフス流行、労働力の不足、抵抗運動の活発化、ゲッターの効果的封鎖が「不可能」あることなどの報告を受けて、総督フランクが最後に決定的な総括演説をし、総督府では、ヒトラーの対米宣戦布告で創出したグローバルな世界的対決軸を踏まえた「ユダヤ人問題の最終解決」(大量殺害)の方針が決まった。いまや、ドイツ支配下の全ヨーロッパのユダヤ人が絶滅対象になった。

1942年1月のヴァンゼー会議の最後で、総督府次官ビューラーは、「最終解決」を総督府から開始することを求めた。

1942年1月30日にヒトラーが世界戦争遂行のため国民統合に向けて行った国会演説でも、統合の重要な精神的武器が反ユダヤ主義による敵の定義であり、敵殲滅の宣言であった。「この戦争の結果は、ユダヤ人が思っているようにヨーロッパのアーリア諸民族が根絶されるのではなく、ユダヤ人の絶滅だ」と。もはや39年1月30日の演説のように「予言だ」と限定することはなかった。この事実も1941年12月をヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅政策開始への転換点とする永岑氏の説を補強している。

ヴァンゼー会議で到達した「最終解決」基本方針の実行は、世界戦争によってアーリア民族が「根絶されるか」、第三帝国ドイツがユダヤ人を「絶滅する」かの二者択一というヒトラーの論理を国民・ナチ党・親衛隊に突きつけた結果であった。この対置がユダヤ人殺戮を正当化する論理となったと永岑氏は述べている。

1942年3月から「ラインハルト作戦」が実行される。42年3月から6月は、大量殺害の第一段階で、春・夏の総攻撃の総体的力学の中で実行された。1942年3月、最初の絶滅収容所ベウジェツの建設がほとんど終了した。ソビボル、トレ布林カと同じように純粋な殺害施設であった。犠牲者は到着直後に殺害された。42年3月13～14日、ゲッターからベウジェツへの移送が始まった。1942年3月半ばから7月半ばまでに約11万人が移送され殺害された。

1942年7月から12月は、大量殺害の第二段階で、スターリングラード攻防戦の総体的力学の中で進められた。1942年6月、ヒムラーは「ラインハルト作戦」の責任者グロブチュニクにユダヤ人の「移動」が1年以内に終了することを命じた。ユダヤ人労働力が就業しているすべての仕事もその時点までに終了しなければならず、終了が不可能であれば、集合収容所の一つに移さなければならないとした。ベウジェツ、ソビボル、トレ布林カでの計画的な連日の大量殺害は、42年後半に大々的に拡大された。ユダヤ人問題「最終解決」・大量殺戮は、総督府に限らず、ドイツ支配下ヨーロッパの西部・東部諸地域で始まった。1942年7月から9月まで、ワルシャワ・ゲッター毎日5000人あるいは1万人がトレ布林カに送られた。

ゲッターは43年夏までに例外なく解体された。43年7月、総督府の「最終解決」がほぼ完遂された。親衛隊・警察部隊は43年11月3日と4日、「収獲祭作戦」でルブリン県の2つの強制労働者収容所とルブリン-マイダネクの囚人ほぼ全員を射殺した。これが総督府で最後の大規模殺害作戦だった。1943年11月、グロブチュニクはヒムラーにラインハルト作戦

の終了を報告した。ラインハルト作戦による殺害者数は、ベウジェツ60万人、ソビボル25万人、トレ布林カ90万人であった。これらの絶滅収容所は、1943年11月までに完全に解体され証拠隠滅がなされた。ラインハルト作戦の三つの大量殺害施設は、1942年3月から1943年春までの局面で「中心的殺害工場」であった。その後初めてアウシュヴィッツ・ビルケナウが重要性を持った。アウシュヴィッツ・ビルケナウの4つのクレマトリウムが稼働しはじめる43年3月、親衛隊統計局が作成したヨーロッパ・ユダヤ人の「減少」に関する総括的統計は、ラインハルト作戦の遂行状況だけでなく、33年政権掌握からのユダヤ人難民化、親衛隊保安部による計画的「対ユダヤ人闘争」開始の37年から42年末までの全体的総括となっていた。それによれば、42年末までに450万が「減少」したと見積もっていた。

第三帝国の全面的敗退過程に至って、ボルシェヴィズムや「ユダヤ国際金融資本」に対する勝利(ヒトラー・ナチズムの「民族帝国主義」の基本目標達成)を主張できなくなった。その結果、「ヨーロッパ・ユダヤ人絶滅」の達成度だけを抽出して統計的に確認しておくことが(ヒトラーにとっては)心理的に必要だったのであろうと永岑氏は述べ、ユダヤ人殺戮という犯罪行為の主体であるヒトラーによれば、それが、ドイツ民族に「感謝される」はずの自分の貢献であったとこの章を結んでいる。

「結び」で、永岑氏は、「民族帝国主義」としてのナチズム、その発現の諸段階・急進化過程としてホロコーストについて、次のように述べている。ナチズムは、ドイツ民族(「民族共同体」)のヨーロッパ支配の帝国主義論理であり、実践であった。周辺諸民族を労働奴隷化し、原料資源の供給先とする広大な生存圏を構築しようとするものだった。この時、他民族支配を正当化するものが人種理論であった。これは帝国主義そのものでイギリス・フランスも同じことをしている。ただ、人種階層の最底辺にユダヤ人を置くイデオロギーがナチズムである。それは第一次世界大戦の「敗北の克服」を目指す論理と行動であった。この思想は、戦争を必然的に内包したが、連合軍の反撃を受けた時、苦境に追い込まれた第三帝国で、他民族抑圧の最底辺に位置づけられたユダヤ人が、抹殺されていくのが「最終解決」(ホロコースト)の実態であった。

アウシュヴィッツがユダヤ人大量殺害の象徴となったのは、アウシュヴィッツ・ビルケナウのユダヤ人大量殺害焼却施設としてのコンクリート製火葬場(クレマトリウム)の残骸等が大量殺害の隠しようもない証拠となったからである。また、敗戦の結果、ヒトラー・ナチズムの「民族帝国主義」の基本目標は、雲散霧消してしまった。「ここに、あらかじめ、ユダヤ人大量殺害だけが、ヒトラー・ナチスの根本目標であったかのようなあやまった観念が生まれることとなった。」と永岑氏は述べ、「ポストコロニアルと冷戦体制崩壊後の忘却の大河に抗し、20世紀前半の世界のリアルな把握のなかに、ホロコーストを位置づける必要性はますます大きくなっている」と結んでいる。

対象の読者を高校生にまで広げていることについて、高校現場で教える立場から気付いた

り、感じたりしたことをあげると、以下ようになる。  
本書の白眉は、先にも述べたように、やはりVEJを駆使して、これまで氏が主張してきたホロコースト論を改めて実証している点である。それだけに、氏が依拠したVEJについては、ホロコースト論を改めて実証しているが、別に節または項目を設けて、目立つ形で説明し序章の「はじめに」の中で説明しているが、別に節または項目を設けて、目立つ形で説明してほしかったと思う。とりわけ、高校の歴史総合・世界史探求の「ホロコースト」の授業で

本書を資料として使用するとき、依拠した史料についてさらに明解な説明があれば、より説得力をもつものとして活用できると考えられる。

本書の文献リストについてだが、主要史料のVEJを始めとして、本書にテーマに関係する基本的な公刊史料・史料集等、本書の土台となった永岑氏の著書・論文、新しい研究書・論文・啓蒙書等豊富な参考文献があげられている。これからホロコーストの研究を始めようとする大学生・院生やこのテーマを深く調べようとする市民にとっては、有り難い限りで、その意味では本書はホロコースト研究の必携の入門書と言っていい。しかし、一方で高校生が読み、探求に活用する本にするためには、参考文献、とりわけ、研究書・論文・啓蒙書は、このテーマを探求するにあたって、最低限読んでおくべき入門書に絞るなど、もう少し整理した方がいいと思う。また、文献リストに上がっている文献は2001年以降に発行されたものでそれ以前のは2003年に刊行された永岑氏の『独ソ戦とホロコースト』を参照してほしいと述べている。しかし、必要に応じてそれ以前に発行された文献もあげている一方で、本書の中で屢々議論の対象となっている栗原優氏の著書の名があがっていないなど、読者がやや戸惑う部分もある。

本書は、啓蒙性・普及性を考えて書かれているが、やはり、予備知識がないと、高校生には難しい部分があるように感じる。確かに、本書で新しく書き下ろした序章や第1章では、個々の事象・事項について、入門者にもわかるような説明がなされている。しかし、紀要論文を基にした第2章以降では、それが少なくなっているように感じる。例えば、ユダヤ人問題の「最終解決」を決定づけた1942年1月20日の「ヴァンゼー会議」についてだが、当然本書では、「ヴァンゼー会議」の名は何度も出てくる。しかし、その会議がどんな会議であったかの説明がないままに会議の内容の記述になるのである(247頁)。予備知識がある読者にとっては問題ないことだが、全くの初心者である高校生にとっては、すぐに理解するのは厳しいと思う(教師が予め解説すればいいことなのだが、それなしに高校生が図書館や本屋で本書を初めて手にした時、やはり戸惑うのではなからうか)。

以上筆者が述べたことで、研究史の今日的到達点を踏まえたホロコースト研究の入門書としての本書の価値がいささかも揺らぐものではないことは勿論だ。「アウシュヴィッツで何が行われたか、また、何があったか」について詳細に述べた本は、多く出されている。これに対して、本書が「アウシュヴィッツ以前に何が行われたか、また、何があったか」に重点を置いているところは重要な点である。また、「民族帝国主義」の概念でホロコーストをとらえる見地は、周辺諸国(特にイギリス、フランス、アメリカ合衆国)が、ドイツにユダヤ人差別・迫害を止めるさせることができずに、ホロコーストにまでエスカレートさせてしまった事情を明快に示している。ホロコーストがなぜ開始されたかを正確に知りたい人に強く勧める1冊である。

(福岡県立高等学校 再任用教諭)

#### 註

1 春風社、2022年、300頁、定価2,500円+税

2 本書の土台となった著書・関係論文は以下の通り。永岑三千輝『ドイツ第三帝国のソ連占領と民衆 1941-1942』同文館、1994年。同『独ソ戦とホロコースト』日本経済評論社、2001年。

同『ホロコーストの力学-独ソ戦・世界大戦・総力戦の弁証法-』青木書店、2003年。同「第三帝国の膨張政策とユダヤ人迫害・強制移送 1938-最近の史料による検証」『横浜市立大学論叢』社会科学系列、70-2、2019年。同「第三帝国の膨張政策とユダヤ人迫害・強制移送 1938-1939」『横浜市立大学論叢』社会科学系列、71-2、2020年。同「第三帝国の戦争政策とユダヤ人迫害-ポーランド 1939年~1941年6月」『横浜市立大学論叢』社会科学系列、72-1、2021年。同「第三帝国のソ連征服政策とユダヤ人迫害・大量射殺拡大過程-占領初期 1941年6月~9月を中心に」『横浜市立大学論叢』人文科学系列、72-3、2021年。同「“ユダヤ人問題の最終解決”-世界大戦・総力戦とラインハルト作戦」『横浜市立大学論叢』社会科学系列、72-2・3、2021年。

3 ウルリヒ=ヘルベルト、小野寺拓也訳『第三帝国-ある独裁の歴史』角川新書、2021年。ヘルベルトについては永岑氏による訳稿(ウルリヒ=ヘルベルト、永岑三千輝訳「ホロコースト研究の歴史と現在」『横浜市立大学論叢』社会科学系列、53-1、2002年)もある。

4 栗原優『ナチズムとユダヤ人絶滅政策-ホロコーストの起源と実態-』ミネルヴァ書房、1997年

5 大木毅『独ソ戦-絶滅戦争の惨禍』岩波新書、2019年

6 大木、前掲書iv-v

7 栗原、前掲書85-105頁、大木、前掲書108頁

## 【彙報】

### 編集後記

『世界史研究論叢』第12号では、論文1本、研究ノート2本、翻訳2本、書評2本と多くの原稿をご投稿いただきました。心より厚く御礼申し上げます。本号は新型コロナウイルス感染症の影響により、例年より刊行が3カ月ほど遅れております。心よりお詫び申し上げます。尚、2023年2月18日(土)に世界史研究会総会・講演会(歴史論研究会との合同開催)を予定しております。本会報の発送とは別に、後日メールにてご連絡申し上げます。

『世界史研究論叢』では、歴史学および周辺諸領域の投稿原稿を募集しております。論文・研究ノートは、すべて厳正な査読を経て掲載が決定されます。翻訳原稿については著作権の問題をクリアしていただければ、掲載可能です。ほかにもエッセイ・書評・文献紹介なども募集しておりますので、投稿希望の方は事務局までお問い合わせ下さい。次号の第13号に対する投稿は、2023年6月30日締め切りとなっております。その後査読審査を経て、同年10月末の出版予定となっております。積極的なご投稿をお願い致します。(事務局)

#### ●会員近況(2022年3月～11月/五十音順) ※申告があったものに限る。

##### ・石黒盛久

(口頭発表) 'Da Machiavelli a Botero: La Ragion di Stato di Botero e le principali caratteristiche della filosofia politica italiana nel trado Cinquecento', Boteriana III Convegno Internazionale di Studi, 2022.11.11, Bene Vagienna. (Italia)

(書評) 定森亮著『共和主義者モンテスキュー古代ローマをめぐるマキアヴェッリとの交錯』、『神奈川評論』第100号、148頁。

(書評) 西田陽一著『戦略思想史入門—孫子からリデルハートまで』、『戦略研究』第31号、157-163頁。

##### ・石塚正英

(単著)『歴史知の百学連環—文明を支える原初性』社会評論社、2022年。

(単著)『歴史知のアンエドクター—武士神道・正倉院箱帳など』社会評論社、2022年。

##### ・板倉孝信

(分担執筆) 茂木謙之介・大嶋えり子・小泉勇人編『コロナとアカデミア』雷音学術出版、2022年5月(担当範囲: 10、74-77頁)。

(論稿)「欧米列強との不平等条約の締結」『世界史研究論叢』第11号別冊(歴史教科書比較調査研究報告)、世界史研究会、2022年3月、22-26頁。

(論稿)「欧米列強との不平等条約の改正」『世界史研究論叢』第11号別冊(歴史教科書比較調査研究報告)、世界史研究会、2022年3月、39-43頁。

(口頭発表)「欧米列強との不平等条約の締結と改正」世界史研究会 2021年度合評会・総会、2022年3月27日。

(口頭発表)「近世・近代におけるイングランド銀行の総裁・理事」第72回日本西洋史学会大会、2022年5月22日。

(口頭発表) 板倉孝信・岡村郁子・河西奈保子「探究と留学に関する夏季オンライン特別講演—コロナ禍の高校生を応援するための取り組み—」令和4年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会(第17回)、2022年5月28日。

##### ・大溪太郎

(共同監修) 村井誠人・大溪太郎監修『一冊でわかる北歐史』河出書房新社、2022年9月。

(研究ノート)「北歐における信仰と社会—現代のノルウェーにおける変化と多様性を中心に—」『東国真宗』第14号、2022年5月、36-47頁。

##### ・岡本充弘

(単著)『「小さな歴史」と「大きな歴史」のはざま—歴史についての断章』花伝社、2022年。

(共編著) Edward Wang, Li Congguo, Okamoto Michihiro, *Western Historiography in Asia: Circulation, Critique and Comparison*, DeGruyter, 2022.

(口頭発表) 'The Possibility of Public History to Criticize Revisionist and Nationalist Thought on History', The 4th Congress of the International Network for Theory of History, 28 April 2022. 於プエブラ自治大学(メキシコ)

(口頭発表)「パブリックヒストリー: 西洋史研究者への問いかけ」司会・問題提起、第72回日本西洋史学会大会、2022年5月22日。

(口頭発表) 'Time Consciousness in Modernity: How Does Science Fiction Manga Writer Think about the Past?', The 6th World Conference of the International Federation for Public History, 17 August 2022. 於ベルリン自由大学(ドイツ)

(口頭発表) 'Reflections of Recent Trends in Japanese Historiography', 23rd International Congress of Historical Science, 22 August 2022. 於アダムミキエヴィッチ大学(ポーランド)

##### ・尾崎綱賀

(研究ノート)「日蓮の歴史観」『世界史研究論叢』第11号、2022年3月、59-80頁。

(論稿)「平安仏教」『世界史研究論叢』第11号別冊(歴史教科書比較調査研究報告)、2022年3月、1-5頁。

(論稿)「鎌倉仏教」『世界史研究論叢』第11号別冊(歴史教科書比較調査研究報告)、2022年3月、6-11頁。

(フォーラム)「一遍ノート(上)・生涯篇」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第82号、2022年3月1日、1-20頁。

(フォーラム)「一遍ノート(下)・思想篇」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第83号、2022年3月1日、1-12頁。

(フォーラム)「佐渡の日蓮—苦境を乗り越えて楽を願う—」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第87号、2022年4月13日、1-16頁。

(フォーラム)「酒井三郎伝—明治・大正・昭和を生き抜いた教育者・歴史学者の生涯—」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第96号、2022年9月22日、1-26頁。

#### ・川島祐一

(論稿)「戦争の時代における木下尚江」『季報・唯物論研究』第160号、2022年8月。

(論稿)「ジーン・シャープ非暴力抵抗の理論」『季報・唯物論研究』第161号、2022年11月。

(フォーラム)「松本平蟻ヶ崎の「道祖神盗み」—信濃路の双体道祖神考」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第84号、2022年、1-4頁。

(フォーラム)「歴史教科書比較調査研究報告(世界史研究論叢第11号別冊2022.3)刊行によせて」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第85号、2022年、1-2頁。

(フォーラム)「日本の軍人とキリスト教信仰」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第86号、2022年、1-3頁。

(フォーラム)「内村鑑三と木下尚江—思想と限界」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第90号、2022年、1-10頁。

(フォーラム)「木下尚江と幸徳秋水—「十字架」の意味」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第91号、2022年、1-9頁。

(フォーラム)「木下尚江と吉野作造—「国家論」の相違」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第92号、2022年、1-7頁。

(フォーラム)「松本に生まれし木下尚江の生涯」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第95号、2022年、1-11頁。

(フォーラム)「木下尚江研究」総目次と編集後記に関する二・三」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第99号、2022年、1-7頁。

(新刊紹介)海野涼子『エステラ・フィンチ評伝—日本陸海軍人伝道に捧げた生涯』、『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第88号、2022年、1-6頁。

#### ・鬼川良一

(論文)「東アジア遠征軍団という経験：義和団戦争におけるドイツ軍の懲罰遠征再考」『日本クラウゼヴィッツ学会会報』第21・22合併号、2022年、21-34頁。

#### ・楠田悠貴

(書評)藤原翔太著『ナポレオン時代の国家と社会：辺境からのまなざし』、『史学研究』第312号、2022年6月、35-43頁。

(新刊紹介)クリスティーン・ル・ボゼック著、藤原翔太訳『女性たちのフランス革命』、『史学雑誌』第131巻(9号)、2022年9月、1520-1521頁(102-103頁)

#### ・黒木朋興

(論文)「ダンテとボードレールは比較可能なか?—19世紀フランスの廃墟のアレゴリーに向けて」『世界文学』第135号、2022年7月1日、46-56頁。

(口頭発表)「ロックと悪魔」音楽史研究会、2022年10月11日。

#### ・齋藤敏之

(論文)「近世ザクセン選帝侯領における手工業者の決闘に関する一考察—法規範と裁判記録を対照させて—」『アカデミア 人文・自然科学編』第24号、2022年、265-278頁。

#### ・清水雅大

(単訳)フレデリック・テイラー『一九三九年：誰も望まなかった戦争』白水社、2022年。

(書評)熊野直樹著『麻葉の世紀：ドイツと東アジア 1898-1950』、『西洋史学論集』第59号、2022年。

(口頭発表)「第二次世界大戦期の日本におけるドイツ・イメージ：戦争と技術の観点から」、2022年度日本クラウゼヴィッツ学会研究大会(オンライン開催)、2022年10月22日。

#### ・瀧津伸

(論稿)「パリ講和会議」『世界史研究論叢』第11号別冊(歴史教科書比較調査報告)、世界史研究会、2022年、44-50頁。

(論稿)「日中戦争」『世界史研究論叢』第11号別冊(歴史教科書比較調査報告)、世界史研究会、2022年、62-72頁。

#### ・永岑三千輝

(著書)『アウシュヴィッツへの道—ホロコーストはなぜ、いつから、どこで、どのように』横浜国立大学新叢書、春風社、2022年3月。

(論文)「第三帝国敗退最終局面とハンガリー・ユダヤ人の悲劇—1944-1945大量殺戮の歴史的文脈—」『横浜国立大学論叢』社会科学系列 第73巻2・3合併号、2022年3月。

(合評会報告)「著者による解題：「アウシュヴィッツへの道」に込めた思い」政治経済学・経済史学会東海部会 第1回研究会、2022年9月24日。

(書評)板橋拓己著『分断の克服 1989-1990—統一をめぐる西ドイツ外交の挑戦』中公選書、2022年9月刊、『週刊読書人』第3459号、2022年11月18日。

(書評)中野智世・木畑和子・梅原秀元・紀愛子著『「価値を否定された人々—ナチス・ドイツの強制断種と「安楽死」』、『社会経済史学』Vol.88, No.3、2022年11月。

#### ・濱田泰弘

(論説)「大学における平和学教育と模擬国際会議の実践—COVID-19以降の大学教育と模擬国際会議の実践的教育的考察」『平和社会学研究 創刊号』2022年(12月刊予定)、19-27頁。

(書評)西原和久ほか著『国際社会における多様性とマイノリティ』有斐閣(2021年)、『北東アジア研究』島根県立大学北東アジア地域センター、2022年3月、75-90頁。

(口頭発表)「大学における平和学教育の試行例—模擬国際会議を中心に—」平和社会学研究会第4回研究会(オンライン)、2022年5月8日。

(新聞・取材記事)「審査合格から5カ月 松江市長再稼働同意—拙速な意思決定」山陰中央新報、2022年2月16日朝刊。

(助言・指導)浜田漁港高度衛生管理型7号荷さばき所への再生エネルギー導入事業者選定審査会プロポーザル(第2回)、ヒアリング及び審査、浜田市環境審議会、2022年4月12日。

(助言・指導) 令和4年度第1回浜田市環境審議会(仮称: 益田匹見発電事業環境影響評価準備書に係る諮問)、浜田市環境審議会、2022年6月22日。

・深町悟

(論文) 'When William Came to Japan: A Comparative Study of When William Came and the Post-War Period of Japan', *Humanities*, 2022, 11(6), 145. [https://doi.org/10.3390/h11060145]

(翻訳) 「無敵艦隊の再来(未来の歴史のある一幕)『一八七五年のドイツによる英国征服とドーキングの戦い』への応答」『世界史研究論叢』第11号、2022年3月、88-100頁。

(口頭発表) 「第一次世界大戦期の英国プロパガンダ局(ウェリントン・ハウス)―その研究と課題―」第3回 国際文化学研究推進インスティテュート2022年度オンラインセミナー、2022年7月22日。

(パネリスト) 部谷直亮・中島浩貴・前田充洋・清水雅大「シンポジウム・戦争とテクノロジー…歴史、現在、未来」2022年度日本クラウゼヴィッツ学会研究大会、2022年10月22日。

・前田充洋

(口頭発表) 「ドイツ帝国におけるコマンド・テクノロジーの嚆矢―素材試験局の誕生とその活動をめぐって―」大谷学会研究発表会、2022年10月21日。

(口頭発表) 「オットー・ブッドと工学研究―19-20世紀転換期ドイツにおける技術職員とコマンド・テクノロジー―」シンポジウム「戦争とテクノロジー…歴史、現在、未来」(報告者: 部谷直亮、中島浩貴、前田充洋、清水雅大) 2022年度日本クラウゼヴィッツ学会研究大会、2022年10月22日。

(セミナー) 「時代を導いた女性―アンゲラ・メルケル元首相―」摂津市立男女共同参画センター ウィズせつセミナー、2022年9月10日。

世界史研究会 役員一覧

- 理事: 石黒 盛久(会長)、石塚 正英(顧問)、新谷 卓、岡本 充弘、尾崎 綱賀、古賀 治幸、中島 浩貴
- 編集委員会・運営委員: 中島 浩貴(事務局長)、板倉 孝信(編集長)、寺田 佳孝(会計)、小島 望、清水 雅大、鈴木 健雄、永島 育、湯浅 翔馬
- 査読委員会: 石黒 盛久(委員長)

<研究会ホームページ: <https://worldhistoryresearch.jimdofree.com/>>

世界史研究論叢 第12号

2023年1月24日印刷 2023年1月31日発行

【編集・発行者】  
世界史研究会

会長: 石黒 盛久 顧問: 石塚 正英  
事務局長: 中島 浩貴 編集長: 板倉 孝信

【本部・事務局】

〒920-1192 石川県金沢市角間町  
金沢大学 人間社会研究域 歴史言語文化学系  
石黒盛久研究室

【印刷・製本】

日本ワントゥワンソリューションズ株式会社  
印刷製本事業部  
〒350-1123  
埼玉県川越市脇田本町6-31 第二KJビル4F  
TEL:049-293-7140(事業部直通)  
FAX:049-244-8691



**World History Research**  
**The Journal of World History Research**

No.12 January 2023

---

**Contents**

Article

A Landscape from the Modern German History Reflected in a Film  
: Production of Visual Space in "LILI MARLEEN" KATSUMATA, Yoko (1)

Research Notes

A Brief Consideration about an Established Theory that Nichiren is a "Prophet".  
OZAKI, Tsunayoshi (28)

Achievements and Challenges of Researching Mittellage-Discourse in Germany  
NOGAMI, Toshihiko (45)

Translations

"Ulema, Devlet ve Rant: İslam Dünyasında Otoriterlik"  
Ahmet KURU (tr. TERADA, Yoshitaka) (62)

"Why We Remain Jews: Can Jewish Faith and History Still Speak to Us?" (2/2)  
Leo STRAUSS (tr. MURATA, Akira) (69)

Book Reviews

Yoram HAZONY (tr. NIWATA, Yoko), *The Virtue of Nationalism*  
KOJIMA, Nozomu (86)

NAGAMINE, Michiteru, *The Road to Auschwitz-Birkenau*  
TAKITSU, Shin (92)

Miscellanea (102)

---

**Sekaishi Kenkyukai (World History Research)**

**Ishikawa, Japan**

# 世界史研究論叢

## 第12号

---

〈論考〉

映画が写すドイツ近現代史の一風景

——「リリー・マルレーン」における映像空間の演出——

勝又 洋子 (1)

〈研究ノート〉

日蓮を「予言者」とする定説に関する若干の考察

尾崎 綱賀 (28)

「ドイツの中央位置」論研究の動向と課題

野上 俊彦 (45)

〈翻訳〉

ウラマー、国家、およびレント

——イスラーム世界における権威主義——

アフメット・クル、寺田 佳孝 訳 (62)

なぜ我々はユダヤ人でありつづけるのか：

ユダヤ教の信仰と歴史はなおも我々に語りかけることができるのか？ (2/2)

レオ・シュトラウス、村田 玲 訳 (69)

〈書評〉

ヨラム・ハゾニー、庭田よう子 訳『ナショナリズムの美德』

小島 望 (86)

永岑三千輝『アウシュヴィッツへの道

——ホロコーストはなぜ、いつから、どこで、どのように』

瀧津 伸 (92)

〈彙報〉

(102)

---

世界史研究会

2023. 1